

砥石12、小型磨製石斧7、石刀2、石錐4、石棒1、ヒスイ剝片17、  
ヒスイ原石3、不明1

縄文前期の住居跡が3軒あるので、まずそれを見ると石錐8、石匙2、磨石・磨製石斧が各1点づつで比較的少ない。石錐が8点というのは該期として当然だが、石匙が少なすぎるようである。なお、東4号住から玦状耳飾が1点出土している。

中期の石器としては、圧倒的に打製石斧・磨石・凹石が多いのは他の遺跡と変わらない。ただ打製石斧と同じ土掘り具や土かき具的用法と考えられる横刃形石器（粗大石器）類が殿村の場合は40点余あるのを見ると少なすぎ、分類上再検討が必要かもしれない。他の石器では削器・搔器・石錐・石匙・小型磨製石斧などの小型切断具や木工用具が少ない点は注意して良い。またヒスイの原石とヒスイ剝片が検出されたのは本遺跡でその加工が行われた証拠として特記されてよいだろう。石器の細かな形態分類なども殿村遺跡報告書に詳しいので参照されたい。

平安時代の住居跡が1軒検出されたが、出土遺物について特記すべきものはない

## 2 装飾把手付土器について

今回の調査においては、顔面把手付土器、獣面把手付土器が各1点づつ出土した。名称のとおり把手部に顔、獣（蛇）が表現されている土器であるが、実際には把手としての機能はなく宗教的意味を持った装飾と考えられている。ここでは殿村遺跡から出土した未発表資料も加えて紹介したい。

顔面把手付土器は、西20・21・22号住居跡が互いに切り合う付近の床面から浮いた覆土中から出土したため、どの住居跡に属するのか不明である。土器は口縁部が「く」の字状にきつく屈曲し、胴部上半でくびれており、それ以下は欠損しているものの、肩がつよく張る器形を呈すると思われる。口縁部には無文帯がひろがり、くびれ部には隆帯が配されている。残存部が把手から胴部上半のみであり、顔面もその一部を欠いている。口径が16cmに復元できる小型の深鉢であり、時期は中期中葉V期になろう。

顔面把手付土器は現在まで村内において5例確認されている。今回の資料に加え、殿村遺跡で出土した未発表資料を数えると7例となる（表参照）。顔面把手付土器については吉本洋子・渡辺誠氏による「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」において資料集成されているが、淀の内・殿村遺跡から出土した4個体はいずれもこの論文中でIV類（典型的な人面装飾付土器であり、大型化、立体化し中空になっているもの）に分類されるものである。IV類は東京都・神奈川県・山梨県・長野県を中心に分布しているが、山形村を含む松本平南域はその分布の縁辺部とされている。ここに紹介した殿村遺跡例（表6番・写真2）は残念ながら顔面を欠損しているが、顔面の高さ、幅とともに13cmを越えるA類（先述の論文による）で、このA類と呼ばれる大型化が顕著に進んだ地域は、伊那谷・八ヶ岳西南麓・甲府盆地・東京都西部から山梨県南部地域とされ、顔面把手付土器が多く出土する発達地域であるという。松本平では、顔面のサイズが小さいC類（顔面の高さ、幅が共に13cm以下）が多く、A類の出土はなかったが、この資料は松本平における大型顔面把手付土器の初例であり、注目に値するものであろう。

獣面把手付土器は西7号住居跡から出土した。口縁部がゆるく内湾し、胴部上半にかけてはややくびれる深鉢形を呈する。口縁部には隆帯が籠目状に付され、胴部には半肉彫り的な幾何学的文様が配され、口縁部から胴部上半にかけては粘土紐をひねったものを斜めに貼り付けている。把手は蛇が土器の中からかま首を持ち上げて土器の外側を伺っているようであり、頭頂部には渦巻き状に線刻がされ、目はなく大きな口はすぼんでいる。口径10.4cmに復元できる小型深鉢で、文様構成は

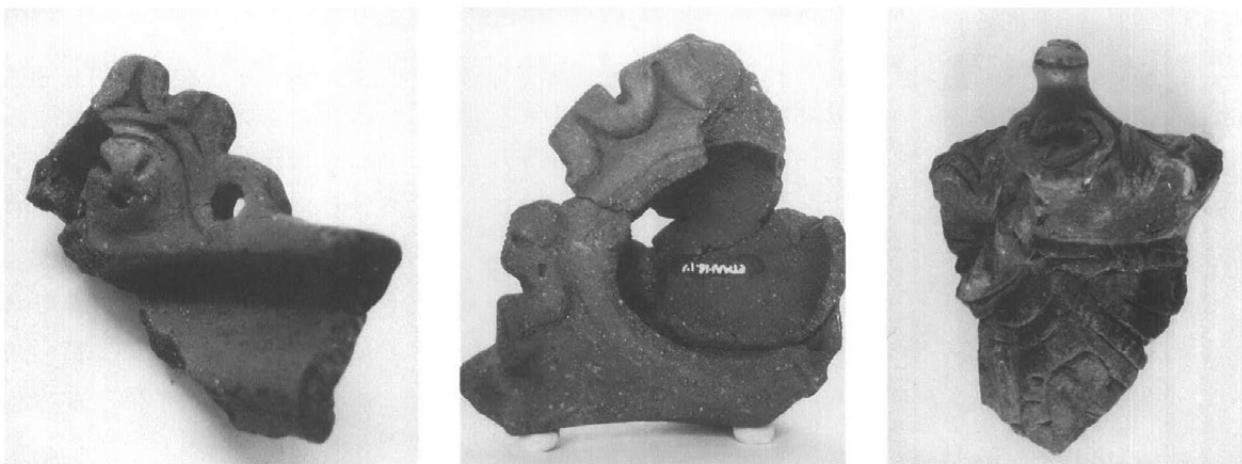
中期中葉VI期から中期後葉I期の様相を示す。

蛇をあしらったと言われる土器は、顔面把手と向き合う位置に蛇を配した岡谷市榎垣外遺跡のものや、顔面把手の頭上に蛇を配した伊那市南福地遺跡、上伊那郡南箕輪村浅間塚遺跡例や、口縁部に蛇がはっているようである茅野市藤内・尖石・棚畠遺跡例などに代表されるものなど多数存在する。しかしながら、本例のようにこれほど忠実に蛇のみを把手として表現したものは類を見ない稀なものではないかと思われる。

いずれもこれまでの通例から外れる資料であったが、資料の紹介のみで考察まで至っていない。今後当分野の研究にいくらかでも寄与できればと思う。なお、本文中で「顔面把手付土器」・「人面装飾付土器」両方の名称を使っているが、本書では「顔面把手付土器」を用い、吉本・渡辺両氏の論文を引用した部分では「人面装飾付土器」を用いた。

#### 参考文献

- 1 吉本洋子・渡辺誠 1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」 『日本考古学』第1号
- 2 青沼博之ほか 1987 『殿村遺跡』 山形村遺跡発掘調査報告書第6集
- 3 渡辺誠 1996 『よみがえる縄文人』
- 4 辰野町郷土美術館 1980 『信濃の土偶』
- 5 藤沢宗平ほか 1971 『長野県東筑摩郡山形村洞遺跡緊急発掘調査報告書』



1 淀の内遺跡顔面把手付土器

2 殿村遺跡顔面把手付土器

3 淀の内遺跡獸面把手付土器

山形村出土顔面把手付土器一覧表

( )付は現存値 [ ]付は復元値

番号	遺跡名	タイプ	サイズ	時 期	高さ	幅	所蔵者
1	殿村	IVC	C	井戸尻I～II	(5.5)	[10.4]	山形村教育委員会
2	殿村	IVC	C	井戸尻I	(4.1)	(7.3)	山形村教育委員会
3	三夜塚	IVC	C	藤内～井戸尻	(7.1)	(9.2)	松本市立日本民俗資料館
4	下原	IIIA		中期前半			松本市立日本民俗資料館
5	松木原？	IIA					所在不明
6	殿村	IVC	A	井戸尻	13.1	(12.3)	山形村教育委員会
7	淀の内	IVC	C	井戸尻I	5.3	(9.1)	山形村教育委員会

\*表は文献1のものに準じている。